フィジー留学 158センチの高3ラガーマン

南の島 仲間が支えに

コロナで都市封鎖、最後の大会中止

フィジーの地域代表「ヤサワ」の選手と記念撮影する井上兼作さん（左から2人目）＝本人提供

歌って踊り、お気に入りの選手の名を叫ぶ。スタジアムはにぎやかだ。「カモーン！ ケン！」。158センチの小柄な日本人は歓声を浴び、笑みをこぼす。「これがフィジー。日本とは全く違う文化です。気持ち良く、気合が入る。僕もようやくローカル（住民）に認めてもらえました」。川崎市出身の井上兼作さん（17）は、2年前から留学先のフィジーでラグビーをプレーする。今年は、新型コロナウイルスの影響でロックダウン（都市封鎖）を経験し、高校最後の大会も中止になった。高校3年生は南の島で何を得たのか。

南太平洋に浮かぶ島国フィジー。飛行機で日本から約9時間、四国とほぼ同じ面積に約89万人が暮らす発展途上国で、青い空と海に囲まれた常夏の観光地だ。公用語は英語で、オーストラリア、ニュージーランド（NZ）などに比べて留学費用が格安なこともあり、近年は語学留学先として注目を集める。

井上さんは中学3年だった2017年12月に日本での通学を前倒しで終え、18年1月に本島西部のラウトカ市にあるバ・プロビンシャル高校に入学した。学校から徒歩15分ほどの距離にあるインド系家庭にホームステイする。日常的に停電や断水があり、日本の生活と異なるが、井上さんは「優しくて、温かく、居心地が良い家です」と話す。日々の食卓に並ぶカレーやカレー風味の炒め物がお気に入りだ。

フィジーでラグビーは、国技といわれるほど盛んで、代表はワールドカップで2度の8強入りを誇り、19年日本大会にも出場。7人制男子は16年リオデジャネイロ五輪で金メダルを獲得した。

たくましく育ってほしいという親の勧めで、井上さんは幼稚園の頃からラグビーを始めた。留学のきっかけは、中学1年の家族旅行。ラグビーボール片手にフィジーを訪れると、街ゆく人々から「ヘイ！」と求められ、パス交換を繰り返し、愛着がわいた。「ラグビーを優先するなら日本や他国の方が環境は恵まれています。でも、語学を学びつつ新しい経験を積むなら、フィジーだと直感しました」と語る。

留学当初、高校のラグビー部のチームメートは友好的だった半面、アジアの選手に対する懐疑的な視線も感じた。井上さんを含めて日本人は2人いたが、練習中に指をさされ、ボールを持つと冷やかしの声を浴びた。「見返してやろうと誓いました。練習から積極的にボールを呼んで、密集にも突っ込みました。英語とともに、試合中に使うフィジー語も覚えました」と言う。

1年でレギュラーの座をつかむと、2年の時は高校の全国大会で過去最高の3位入賞に貢献。チームメートから「最初はここまでやると思わなかった。良い選手だな」と認められた。3年となる高校最後の年は、優勝を狙っていた。

ところがである。フィジーでは3月中旬、初めて新型コロナの感染者が確認され、井上さんが暮らすラウトカ市はロックダウンされた。同市に滞在していた100人あまりの日本人語学留学生は、4月のチャーター便で帰国した。

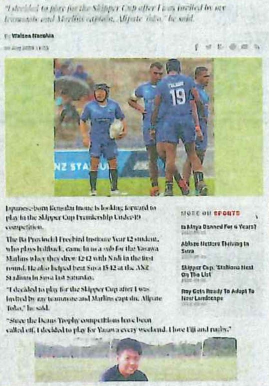
現地に残った井上さんは3月下旬から3カ月間、自宅にこもる生活を送った。不要不急の外出が禁じられ、まともな外出は月に1度の日用品の買い出しだけ。「ずっと家にいることは本当にきつかった」が、ラグビーが心の支えになった。例年5月に始まる高校の大会は延期されたものの、開催されるという情報を耳にしていたからだ。

「最後の大会があると信じていました」。自宅では自習の傍らで、筋力トレーニングを欠かさなかった。しかし7月初旬、大会の中止が発表された。「フィジーでも自分たちの世代、チーム、仲間を大切にします。みんなでプレーができなくなり、悔しかった。こんな形で終わってしまうのかと、頭の中が真っ白になりました」

そんな時、島しょ部のチーム「ヤサワ」の主将を務める同級生から地域対抗全国大会「スキッパーカップ（U19＝19歳以下）」に誘われた。全国8地域の代表が優勝を争う大会は7月下旬に開幕。高校の大会よりもレベルは上がるが、井上さんはスクラムハーフ（SH）として開幕から4試合連続出場。懸命に食らいつく姿勢が評価され、チームロゴのカジキを意味するフィジー語「ボロワンガ」の愛称を授かり、プレーぶりは地元メディアに取り上げられた。

「もうラグビーはできないと諦めていましたが仲間が救ってくれました。感謝しかない。全てを出し切ろうと思います」と、新たな挑戦を楽しんでいる。

大会は10月まで続き、12月に高校卒業を控える。卒業後は別の国の大学を目指すため、フィジーでの生活も残りわずかだ。井上さんは「人種は関係なく、努力すれば受け入れてもらえます。昨日の自分を超え、よりよい毎日を送ろうと過ごしてきました。今しかない、二度とできない経験です」と話した。【谷口拓未】



Japanese-Born Inoue Loves Fiji, Rugby

"I decided to play for the Skipper Cup after I was invited by my teammate and Marlins captain, Alipate Tuko," he said.

Japanese-born Kensaku Inoue is looking forward to play in the Skipper Cup Premiership Under-19 competition.

The Ba Provincial Freebird Institute Year 12 student, who plays halfback, came in as a sub for the Yasawa Marlins when they drew 12-12 with Nadi in the first round. He also helped beat Suva 15-12 at the ANZ Stadium in Suva last Saturday.

"I decided to play for the Skipper Cup after I was invited by my teammate and Marlins captain, Alipate Tuko," he said.

"Since the Deans Trophy competitions have been called off, I decided to play for Yasawa every weekend. I love Fiji and rugby."

MORE ON SPORTS
Is Maya Banned For 6 Years?
Ablaze Netters Thriving In Suva
Skipper Cup: 'Stallions Next On The List'
Ray Gets Ready To Adapt To New Landscape

㊤井上さんを取り上げた現地の日刊紙フィジーサン（電子版）の記事 ㊦フィジーのバ・プロビンシャル高校ラグビー部のチームメートと円陣を組む井上さん（背番号9）＝本人提供